

## 読解力・表現力指導の展開先

—PISA 型読解力の様相を探る—

企画者・司会者	岸 学(東京学芸大学教育学部) <sup>#</sup>
話題提供者	中村光伴(熊本学園大学社会福祉学部) <sup>#</sup>
話題提供者	梶井芳明(東京都中央区立城東小学校) <sup>#</sup>
話題提供者	辻 義人(小樽商科大学教育開発センター) <sup>#</sup>

### ■企画の主旨

岸 学

現在、学力のとらえ方及び学習指導の内容に、PISA(Programme for International Student Assessment)の影響が強く見られている。特に、読解力や表現力の面では、従来の国語教育とは大きく異なる内容、単元、教材が導入されつつあり、児童・生徒に身につけてほしい学力が様変わりしてきている状況にある。

このシンポジウムでは、PISA に関連する読解力、表現力の内容と研究状況を紹介します。LD 児の読み書き・表現指導の実際や研究成果は、学会での研究発表やシンポジウムを通じて知ることができるはずである。そこで、敢えて LD 児研究を行っていない方々を話題提供者にお願いし、PISA に関連する研究成果の紹介をしてもらうこととした。理由は、基礎的な読み書き表現力の育成のその先にはどのような指導展開があり、それに向けて何を準備すべきかを相互に共有するためである。

話題提供の最初(中村氏)は、非連続型テキスト(non-continuous text)の理解についてである。非連続型テキストをどのように理解するのか、何が発達するのかについては教育心理学ではあまり解明されていない。にもかかわらず教材化され、テストに出題されている現状に対して、問題点を指摘していただきたいと思っている。

次は聴き取りによる理解である(梶井氏)。読みの過程や処理に関する研究は多いが、それに比べて聴きの研究は少ない。特に、説明の聴きについては、影響要因や発達などがほとんどわかっていないと言っても過言ではない。おそらく作業記憶の関与は予測できるものの、その詳細は不明である。そこで、実際の聴き取り指導を通じて得られた成果を紹介していただき、聴き取り指導の展開の方向を考えていきたい。

最後は表現力で、「わかりやすい説明表現」(辻氏)についてである。表現力育成の中核として、

この能力・技能に関心が向けられているのである。わかりやすく説明するには複雑な認知技能が必要だが、特に相手意識(audience awareness)の重要性が指摘されている。しかし、それはどのように指導するのか、そもそも指導可能なのかを含めて、研究の現状と今後の研究予測の紹介をお願いします。

### ■非連続型テキストを含む文章の読解リテラシーの育成について

中村光伴

教科書には図表、挿絵、資料、写真などの文章以外のコンテンツが数多く含まれている。このような文章以外のコンテンツは、文や段落で構成された文章(連続型テキスト)に対し、非連続型テキストと分類される。

近年、PISA の結果分析から、この非連続型テキストを含んだ文章の読み方が注目されている。PISA で扱われている問題では、知識の質や量を測る問題だけではなく、情報入手・管理・統合・判断する力であるリテラシー(literacy)が扱われている。PISA ではそのリテラシーを、読解リテラシー、数学リテラシー、科学的リテラシーの3つに大別しているが、なかでも読解リテラシーは、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する力とされる。

また、このようなリテラシーについては、日本においても全国学力・学習状況調査の「活用(B 問題)」で積極的に扱われており、知識・技能等を実生活のさまざまな場面に活用する力や、さまざまな問題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力について出題されている。

このように、学力に関するリテラシー・アプローチが注目される中、各教科では教材化され、テストにも出題されている現状がある。しかし、各教科においてこれらのリテラシー育成がまだ十分に出来ていないことは PISA や全国学力・学習状況調査の結果から明らかである。そ

ここで育成法についての早急な検討・開発は望まれるが、検討するだけの基礎的な知見が整っていない現状も一方ではある。

そこで、本報告では非連続型テキストを含む文章の読解リテラシーに注目し、中学校歴史分野の教科書を材料として用いた教育心理学での研究を中心に紹介する。まず、非連続型テキストを含む文章の読解過程と内容理解の支援方法について検討する。さらに、読解方法(学習者が実際にどのような読み方をしているのか)と内容理解との関連から読解リテラシーについて検討し、今後、どのように育成していくべきかを考察したい。

## ■聴き取り能力の発達の予測的知見

### ～小学校 5 年生のスピーチ場面からの考察～

梶井芳明

教育実践場面(以下、実践場面)で、指導目標や評価規準の設定といった、いわゆる指導・評価のよりどころとなるのが学習指導要領である。小学校国語科における「話すこと・聞くこと」の指導領域の内容を、さらに「話すこと」「聞くこと」「話し合うこと」に分類し、それぞれの内容と評価例、および言語活動例を概観すると、次の 2 つの課題が見えてくる。

1 つは、「聞くこと」の評価例や言語活動例が、「話すこと」に比べて少なく、「話すこと」や「話し合うこと」に付随した学習になりがちであること。もう 1 つは、「話し合うこと」についての言語活動例が、「話すこと」「聞くこと」に比べて極端に少なく、対話から討議へと移行する話し合い活動が明確でないことである。

学習指導要領(平成 11 年度版)・要録の実施に伴い、「目標に準拠した評価」が一層重視されることとなった。「目標に準拠した評価」を行うには、指導計画の段階で児童の実態に応じて、育成すべき能力を明確にする必要がある。

これまでも、国語科教育をはじめ教育心理学、発達心理学の分野では、談話を取り巻く状況や、相互作用を考慮に入れた研究が数多くされてきた。ところが、これまでの研究の多くは、実践場面における談話の様相を観察、記述することに重点が置かれてきたように思われる。そこで本報告では、小学校における「話すこと・聞くこと」の実践場面、具体的には、小学校 5 年生のスピーチ活動を取り上げ、教員によ

る児童のスピーチの様子に対する評価結果と、児童による他の児童のスピーチの様子に対する評価結果をもとに、話し上手・聞き上手に至る発達過程を予測し考察を加えたい。従来の研究と異なる点は、数量的データおよび質的データの両面から、結果と考察を導き出す点である。

## ■「わかりやすい説明方法」を指導する

辻 義人

説明とは、説明者が受け手に知識を伝達することを目的とした活動である。これまで、説明活動は、教育における多くの場面において、あまりに普遍的であったため、研究対象として注目される機会は少なかった。しかし、近年、教育を始めとした多様な領域において、わかりやすい説明の重要性が認識されつつある。

PISA 型読解力において、説明活動はどのように位置づけられるのだろうか。PISA 調査における読解力の定義に基づいたとき、①自らの目標達成を促し、②自らの知識と可能性を発揮させ、③効果的に社会に参加する、これら 3 点の目的を達成するために「書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」が必要と読み取ることができる。このことから、説明能力は、PISA 型読解力の枠組みにおいて直接測定される能力ではなく、PISA 型読解力の延長線上に存在する、上位の目標と位置づけることができるだろう。

わかりやすい説明を行うには、非常に複雑な認知処理が求められる。辻ら(2003)は、わかりやすい口頭説明のあり方として、説明者の認知情報処理モデルを提案している。このモデルでは、説明のプロセスを大きく 2 段階に分けている。第一に、説明者は聞き手の状況(目的・技能・現在の進行状態)を推測する。第二に、説明者は聞き手の求める内容を選択し、その聞き手の状況に適した形で知識を伝達する。さらに、説明者は聞き手の発言や身振りなどの反応を手がかりとして、再び第一のプロセスに移行するのである。この説明モデルは、相手意識を中心とした循環的な認知情報処理モデルといえる。

本報告では、現時点における説明研究の動向を概観し、わかりやすい説明を促す指導について提言を行う。この提言を土台として、LD 児に対する説明指導のあり方に関する議論を行い、広く知見を共有したいと考えている。